

2025 年8月 31 日 聖霊降臨節 第 13 主日礼拝

メッセージ「相手の中に神を見る」

牛田匡牧師

聖書 コロサイの信徒への手紙 3章18節-4 章1節

今年は、アジア太平洋戦争での敗戦から 80 年ですが、先日 NHK ラジオで、「宗教は戦争責任をどう考えてきたのか」という番組(2025 年 8 月 17 日)が放送され、まさに戦争中の 1941 年に成立した私たちの日本基督教団の歴史と、その戦争責任告白についての話がありました。イエス様の言葉と振る舞いになって、隣人愛と平和を説くはずのキリスト教が、なぜ戦争に協力したのか。それこそ全国各地の教会や、いわゆる「ミッションスクール」と呼ばれるキリスト教学校では、戦争中に熱心に献金が集められて、高額な戦闘機が陸軍と海軍に何機も献納されたことすら行われていたそうでした。しかも、それらは仏教界などの日本の他の宗教団体と比べても異例のことだったそうです。

なぜ、そのようなことが起こったのか。そこには様々な理由が複雑に絡み合っているのだと思いますが、一つはキリスト教が外国から来た宗教であり、しかも戦争で戦っている相手方に歴史的起源を持っている「敵性宗教」だったからではないかと語られていました。明治以前は、キリスト教は邪教として禁教令で禁止され、長く迫害されてきた歴史がありました。それが明治になってから、禁教令が解かれ、信者が増えたとはいえ、まだまだ日本社会の中では圧倒的な少数者でした。

また「治安維持法」の下で、1942 年 43 年には教団内のホーリネス系の教会に対して、一斉検挙が行われ、43 年には文部省から教団に対して教会の解散命令と、教師の辞任が通達され、教団もそれに従って処分したということがありました。拘留されていた教師たちの中には獄中で死亡した人も、出獄後に死亡した人も何人もいました。また、そのように検挙はされなかったとしても、毎週の礼拝には特高警察がやって来て、牧師や信徒たちに何か不審な言動がないかどうか、目を光らせていたとのことでした。そのような時代状況でしたから、教会が生き残り、存続していくためには、時局に従って、国威掲揚、戦意高揚のメッセージを語ったり、慰問袋を始めとする様々な献品をしたりして、それらが教会の外の人たちだけでなく、内側の人たち自身にとっても愛と平和につながる具体的な信仰実践として受け止められていったのではないかと思います。もちろん、それは日本だけではなく、世界中でそうだったのではないのでしょうか。

ドイツの教会は、ナチスの暴走を止められず、戦争協力をしたことに対し、敗戦

後間もない 1945 年に「シュトゥットガルト罪責告白」を發表しました。日本基督教団では、それから 22 年後の 1967 年に「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」がなされました。22 年間というそれだけの時間が必要だったのは、戦中を歩まれた当事者の方々からの世代交代に、それだけの時間が必要だったからでもあったのでしょう。しかし、それらのことを考えてみても思わされるのは、一度、戦争への坂道を下り始めてしまっただけは、宗教も教育も、ジャーナリズムも、その転がりを止めることは出来ない、ということです。だからこそ、戦争という愚かなことを二度と繰り返さないためにも、坂道を下り始めそうになるところで、押し留めないといけません。

「日本基督教団 戦争責任告白」の中では、次のように述べられています。

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。

神様の意志を離れて、国が誤った方向に進まないように、見張りの使命を与えられていた聖書に登場する預言者たちのように、教会もまた社会に対する見張りの使命を、今もなお与えられているのだと思います。

そのようなことを考えながら、今回の聖書の言葉にも目を向けてみたいと思います。今回の言葉は、いわゆる「家庭訓」と呼ばれるもので、妻や子ども、奴隷たちに対する訓示、心得の訓えとなっています。この「コロサイの信徒への手紙」の他にも、「ペトロの手紙Ⅰ」(2:11-3:12)や、「エフェソの信徒への手紙」(5:21-6:9)などにも同様の「家庭訓」が記されています。

しかし、福音書に記されているイエス様の言葉と振る舞いは、そんな「家庭」内の関係に留まるものではありませんでした。今回の「招きの詞」でもあったように、「私の兄弟、姉妹、母とは、(血のつながりではなく)天におられる私の父の御心を行う人なのだ」(マタイ 12:49-50)とされています。また「ルカによる福音書」には、イエス様の言動に感動した一人の女性が「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」と言ったのに対して、イエス様が「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」と言ったというお話もありま

す(11:27-28)。

パウロは身分や職業、土地や血縁に厳しく縛られていた当時の社会の人たちに対して、その手紙の中でそれらからの解放を述べています。「あなたがたは皆、真実によって、キリスト・イエスにあって神の子なのです。キリストにあずかる洗礼(バプテスマ)を受けたあなたがたは皆、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです」(ガラテヤ 3:26-28)。これらこそが、イエス様が伝えたことであったはずであるのに、どうしてそれが、いつの間にか変わってしまったのでしょうか。聖書の中には、他にも、これらのイエス様の言動とは裏腹に、全く対立するような言葉もあります。「女は静かに、あくまでも従順に学ぶべきです。女が教えたり、男の上に立ったりするのを、私は許しません。むしろ、静かにしているべきです。～女が慎みをもって、信仰と愛と清さを保ち続けるなら、子を産むことによって救われます」(テモテへの手紙Ⅰ 2:11-15)……。どうして、このように矛盾する言葉が、記されているのでしょうか。どちらか一方が正しく、他方が間違っているのでしょうか。

そのことを考える時、先の戦争中に教会で日曜日の礼拝ごとに、特高警察の人たちを聴衆に交えながら、牧師たちが語っていたメッセージのことを思い出しました。また戦地から軍部の検閲を経て、日本にいる家族の下へ届けられた手紙の文面などもそうでしょう。一読すると「お国のために敵を雄々しくやっつける」と書いてありながら、その本意や真意はどこにあったのか。そのような文章を記さないと、決して家族の手元まで届けられることはなく、後の世に残されることもなく、いとも簡単に奪われて、消されてしまう、そのような圧倒的な権力や暴力の下で、あえてそのように書かざるを得なかった、と考えることもできるのではないかと思います。戦地で手紙をしたためた人たちの本心、本音は、たとえ文字として文章に書かれていなかったとしても、自分が今まだ生きていて、家族や友人たちを思って手紙を書いていること、皆が無事に過ごせるようにとの祈る思いだったのではないかと想像します。

コロサイ書の「家庭訓」では、始めに「妻と夫」について、「妻、女は夫、男に従いなさい」(3:18)と言われ、続いて「子どもは親に従いなさい」(20)、そして「奴隷は主人に従いなさい」(22)とされています。そして続けて「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい」(23)とされています。この23節の言葉こそが、この「家庭訓」と呼ばれている文章の中心であり、手紙の著者が最も伝えたかったメッセージなのではないかと思います。

一見すると、女性や子ども、奴隷よりも、男性、親、主人が上に立ち、彼ら彼女らを支配し、従属させているように読めます。確かに、ローマの帝国支配が及んでいる時代にあっては、そのようにすることがローマ帝国の求めている「家庭訓」であり、当時の社会で広く受け入れられていました。だからこそ、「ユダヤ教から派生したナザレのイエス派であるキリスト教は、決して社会の転覆を目指している危険な反抗分子ではありません」と、ローマ当局に対してアピールして、集会、教会が消されてしまうことのないようにしたというわけです。ですが、彼らが本当に伝えたかったのは、妻と夫、女性と男性、子と親、奴隷と主人は、どちらが上とか下とか、従わせるとか従うとかではなく、それぞれお互いに相手の中に「イエス・キリストが共におられる」ということを見ること、だったのではないのでしょうか。言い換えるならば、「何をするにも、それは人間に対してすることではなく、神様に対してするのだと思って、気持ちを込めて行ってください」ということだったのだらうと思います。

相手の中に神様の存在が確かにあるということを見る時、私たちは決してその相手をぞんざいに扱うことはしないはずです。誰か生まれつき偉く、特権を持っている人は大切にされるべきだと言うのではなく、他人も自分も、誰もがその中に神様から与えられている命を持ち、尊厳や人権を持っていて、そのままで尊いのであって、自分だけではなく、隣の人も、向かい合っている相手の中にも、同じものがあり、神様は共におられると言われます。そのようにしてお互いが、相手の中に共におられる神の存在を見出していく時、この世界には愛と平和が広がっていくのではないかと思います。

「戦後 80 年、二度と戦争は繰り返してはならない」と言いながら、今日、世界はまさに戦争への下り坂を下り始めています。たった今もあちこちで多くの血が流され、命が奪われています。そのような大きな暴力が振るわれている中で、それでも光が暗闇に閉ざされてしまわないように、私たちは命と平和の神に祈り求め、そして全ての命が生かされる道を歩み続けます。

この後に歌います賛美歌「風と歌う」は、20 年前にカナダで作曲され、日本語訳の歌詞は 10 年前に作られたそうです。紛争で故郷を追われて難民とならざるを得なかった人たち、ヘイトスピーチや数々の差別など、人と人とが隔てられて、排除されている現実の中で、それでも神様はこの世界と人間とを見捨てず、諦めず、聖霊の風を送り、光を灯し、働きかけてくださっています。私たちもその神の息吹に背中を押されて、相手の中に神を見る歩みへと歩み出して参ります。